

四無畏、四無礙智、十八不共法、三十二相、八十形隨好、五百陀羅尼門である。

第三、須菩提よ、四念處とは心を一點に集中して、雜念妄念の起るを防ぎ眞理の洞察に努むるもの。肉身を觀じ肉身に心を集中して眞理を洞察するものと、感覺を觀じて感情に心を集中して眞理を洞察するものと、心を觀じて心に心を集中して眞理を洞察するものと、外界諸象を觀じて外界諸象に心を集中して眞理を洞察するものとの四種がある。かくして、心を統一し、勤めて精進し、二心に智慧觀をなして佛道にいそしむものである。

須菩提よ、四正勤とは善を増長し、惡を滅滅する修道法である。(一)未だなきの惡の行爲をば努めて抑制して起さしめず、(二)既になした惡不善の行爲をば勤めて斷滅して再びなさず、(三)未だなきの善の行爲をば努めてなさうと精進し、(四)既になした善の行爲をば更に増長せしめ、更に進展せしめる。須菩提よ、この四種を四正勤と名づける。

須菩提よ、四如意足とは神通の力を得て煩惱を斷滅する四種の階程を云ふ。即ち一は神通に到るべき希願を起し、よく心を統一集中する。二は希願より更に實踐に向ひ精進努力にすむ。三は心を抑制統一して散亂することをなからしめる。四は思惟の力は神通の實現として具備せられる。

須菩提よ、次に五根とは信根、精進根、念根、定根、慧根の五を云ふ。五力とは信力、精進力、念力、定力、慧力を云ふ。七覺分とは念覺分、擇法覺分、精進覺分、喜覺分、除息覺分、定覺分、捨覺分を云ふ。八聖道分とは正見、正思惟、正語、正業、正命、正精進、正念、正定の八を云ふ。

第四、須菩提よ、佛の十力とは佛が一切の生存を救濟するに必要な根本要件である。一には佛はなすべき事となすべからざることとを誤りなく知る。二には佛は一切の生きとし生けるものに就いて過去未來のもろくの行爲、もろくのの結果を知り、その因縁を知り、その果報を知る。三には佛はもろくの禪定、解

脱等に就いて、その垢淨の差別を如實に知る。四には、佛は世間の人々に就いて、利鈍上下の性質を知る。五には、佛は人類の種々の信心了解心を知る。六には佛は世間各般の力量特性の差別を知る。七には、佛はもろくの佛道の淨穢差別を知る。八には、佛は種々の過去及び未來の歸趣を知り、一切の落ち行く運命を知る。九には神通力によつて生きとし生けるもの生死轉生を知り、善惡の世界に生ずるものを如實に知る。十には佛は一切の煩惱を斷盡して解脫の境を知る。

須菩提よ、次に四無所畏むじふいとは金剛不拔の佛の偉德に名づける。佛は眞實の語をなして言ふ「我は是れ一切萬有を正しく知る」と。又云ふ「若し、沙門、波羅門、又は天神、又は魔神、又は衆人等來つてわれを罵り、汝は實の如く眞理を知らずと云ふとも、われは毫も畏れ、驚くことなし」と。かくして、佛は安穩を得て、ゆるぎ變ずることなく、大衆の中に在つて獅子吼をなし、教を宣布する。天神、魔神、沙門、波羅門等の及ぶところではない。須菩提よ、之を第一の無所畏とな

す。次に佛は更に眞語をなして云ふ「われは一切の煩惱の穢れを斷滅せり」と。若し、沙門、波羅門、天神、魔神等が來つて、汝未だ煩惱の穢れを斷滅せずと稱するとも、佛は毫も怖畏を感ずる事なく心安穩に住して侵されず、大衆の中に獅子吼して教を宣説する。須菩提よ、之を佛の第二の無所畏となす。次に佛は更に云ふ「われは障法を説く」と。若し、沙門、波羅門、天神、魔神等が來つて、「汝の教をうくるとも道を障へず」と云ふとも佛は毫も驚き畏れる事がなく心常に安樂に住して侵されず、大衆の中に獅子吼して教を宣説する。須菩提よ、之を佛の第三の無所畏となす。次に佛は更に眞語をなして云ふ「わが説くところの聖道はよく世俗を脱し、よく苦惱を斷滅す」と。時に沙門、波羅門、天神、魔神等が來つて「汝の説くところは眞に世俗を脱し、苦惱を斷滅するものに非ず」と云ふとも、佛は毫も驚怖を感じ又はゆるぎ變ずる事が無い。心常に安穩に住し、大衆中に獅子吼して教を宣説する。沙門、波羅門、天神、魔神等の遠く及ぶところでは

ない。須菩提よ、之を佛の第四の無所畏とする。佛はかやうな偉徳によつて教を説く。是を佛の四無所畏と云ふ。

須菩提よ、次に四無礙智とは一には義無礙智、二には法無礙智、三には辭無礙智、四には樂説無礙智を云ふ。義による智慧を義無礙智とし、法體即ち眞理に相應する智慧を法無礙智とし、言語による智慧を辭無礙智とし、文章説明による智慧を樂説無礙智とする。

第五、須菩提よ、佛の十八不共法とは一には諸佛は身に過失なく、二には口に過失なく、三には心に過失なく、四には變異の想なく、五には不定の心なく、六には不知已捨の心なく、七には欲減することなく、八には精進減することなく、九には念減することなく、十には智慧減することなく、十一には解脱減することなく、十二には解脱智見減することなく、十三には一切の肉身の行爲は智慧に隨つて行ひ、十四には一切の言説は智慧に隨つて行ひ、十五には一切の心作用は智

慧に隨つて行ひ、十六にはその智慧が無限の過去世を知り、十七にはその智慧が未來世を知ること無窮、十八にはその智慧が現在世を知ること無礙である。此の十八を佛の特質、即ち不共法と云ふ

須菩提よ、佛の三十二相とは佛身の備ふる偉相である。一には足下安平なり。二には足下に千輻輪相あり。三には手足の指長くして餘人に勝る。四には手足柔軟にして餘身に勝る。五には足跟廣くして具足圓滿なり。六には手足の指と指との間は網皮連結す。七には足趺高く平にしてよく跟と相應す。八には膈々織好にして鹿王の如し。九には直立するに兩手膝に至る。十には陰部の相、馬王象王の如し。十一には身は縱廣均等なり、十二には一々の孔より一毛生じ、色青く柔軟にして右に旋る。十三には毛髮上に向ひ青色柔軟にして右に旋る。十四には金色の相を放ち、十五には身光の面一丈なり。十六には皮薄く細く滑かにして塵垢を受けず、蚊や蚋を停めず。十七には七處圓滿す。兩足の下、兩手の中、兩肩の中央

頂上、皆滿じ、字相分明なり。十八には兩腋の下圓滿す。十九には上身獅子の如し。二十には身廣く端直なり。二十一には肩圓好なり。二十二には四十齒あり。二十三には齒白く、齊密にして根深し。二十四には牙最も白くして大なり。二十五には方頰車師子の如し。二十六には味中に上味を得、咽中の二處津液派出す。二十七には舌大きく軟薄にして能く覆面して耳の髮際に至る。二十八には梵音深遠にして黃鶯の聲の如し。二十九には眼色金精の如し。三十には眼瞳牛王の如し。三十一には眉間の白毫相軟白にして綿の如し。三十二には頭の頂は肉骨よりなる。須菩提よ、佛はこの三十二相を圓滿に具足し、遍ねく一切の世界を照す。

須菩提よ、聖者が眞智を求めて衆生を救濟するときには、よく學問をして諸々の文字を知る。一字より四十二字に至る一切の文字を知り、その中にもろくの意義を有することを知る。聖者は之等を知り終つて更によく字法を説き、字法の空なることを説く。なせならば、一切の文字は悉く假に設けられた表現の形式に

すぎないからである。それ故に、文字は佛の眞實法ではない。須菩提よ、聖者はかくして一切の生きとし生けるものを愛し、諸種の財施と以上の如き各種の法施とをなす。この偉徳靈能は甚だ稀有にして、凡夫人の及び難いものである。

第六、須菩提よ、次に四事の中、第二に聖者は愛語をもて衆生を教化する。即ち聖者は六種の聖行をもて一切の生存の爲めに説法して申されるやう、「汝は六種の聖行を行つて一切の善法を攝取すべし」と。

第三には聖者は利益をもて衆生を教化する。即ち聖行の果報を説き、長く救濟を事とし衆生をして聖行を行はしめる。

第四には聖者は同事をもて衆生を救濟する。即ち聖者は在迷の衆生と所作を同じくし、種々の神通力によつて地獄、餓鬼、畜生等に變生して救濟の本願を成就する。須菩提よ、以上の三事は極論すれば畢竟皆第一の布施、即ち財施と法施との中に包含せられる。それ故に茲には略説するのである。

時に願菩提は世尊に申されるやう、

『世尊よ、若し生きとし生けるもの即ち生存と云ふことが之を探究するとも畢竟得難いならば、一切の萬有も亦得ることが出来ませぬ。亦それと同じく、真理も真相も得ることが出来ませぬ。世尊よ、然らば、聖者はどうして眞智道を行ひ、又は禪定、精進等の聖行及びもろくの佛道を行ふのでせうか。又聖者が眞智道を行ふときには、聖者も、聖者の名もあることがなく、又聖者道もあることがありません。然らば、聖者は如何にして眞智を行つて人類を救済するのでせうか。』

『須菩提よ、今汝が云ふやうに、生存の生存とすべきものがなく、畢竟皆空である。それ故に、内空外空乃至無法有法空と説く。又物界心界の諸象も、外道が實在なりとして稱へる神我も空、壽者も空、造物主も空である。又一切の佛道も聖者も、聖者の位も皆空である。須菩提よ、若し聖者が一切の事象を見て、かや

うに觀察すれば、正覺も亦空なりと知り、一切空の中にあつて、しかもよく人類を救済する。即ち一切皆空なりと知れば、一切の萬象は皆無礙となる。一切皆無礙なりと知れば一切の萬象は悉く一味となり不二不分となる。かやうに平等の宇宙觀に立つて、しかも佛は千萬無量の人類に對して、或は布施せしめ、或は持戒せしめ、或は忍辱せしめ、乃至もろくの佛道を行せしめる。けれども、それは世俗に随つて説き示すもので、第一義眞實境ではない。第一義境には差別あることなく、不垢不淨、一味平等である。

須菩提よ、かやうにして、聖者は一切の生きとし生けるものの爲めに萬有を説き示すけれども、萬有を差別的に觀察し、萬有の個在を認めることはない。聖者は一切のものに愛着せず、他に教へて愛着せしめず、布施をなすとも、布施をなせりとせず、平等の慧眼を得て、よく一切を如實に知るのである。』

第二 平等品

一、一切萬有皆平等一味

二、平等相は即ち佛なり

第一、聖者須菩提は釋尊に問ひ奉るやう。

『世尊よ、實を知るものは淨でもなく、又不淨でもありません。又實を知らぬものも淨でもなく又不淨でもありません。即ち眞理を證つた人も、證らぬ在迷の人も共に淨不淨がありません。なせならば、一切の萬有は個在なく、獨存性なく、本來淨不淨がないからであります。世尊よ、然らば眞理を説き示す聖者も虚偽を語る愚人もともに淨不淨がないのでせうか。』

『須菩提よ、一切平等の眞理は本來實不實なく、淨不淨なしとするものをもて、予は淨なりとする。何をか一切法平等なりとせば、所謂、眞如、眞理、眞相、實際、實相等である。これらは佛の世に在ますときも、また世に在まさぬときも、

常に變ることがない。これを予は淨と名づける。但し、それは第二義的の言辭である。若し、第一義的に論ずれば眞理は言語を超絶してゐる。』

『世尊よ、若し、一切の萬有が幻の如く、夢の如く、響の如く、焰の如く、影の如く、化の如しとせば、聖者は如何にして、不斷不滅なる求道心を發し、如何にして眞智を修むべきでせうか。世尊よ、夢や響や焰は皆實在せぬ虚妄のものであります。この虚妄のものをもて、どうして布施等の聖行を具足し、佛道を具足すると云へませうか。』

『須菩提よ、今、汝が問ふやうに、虚妄不眞實なるものをもて聖行を具足し、佛道を修することは出来ない。まして不眞實の法をもて正覺を成就することは出来ない。須菩提よ、凡そありとあらゆる萬象は皆憶想思惟によつて生ずる。この憶想思惟、即ち認識によつては到底佛の妙境たる一切種智を得ることが出来ない。差別的思想によつては到底平等一如なる眞實義を體驗することは出来ない。』

第二、「世尊よ、世尊がさとりを成就せられ、一切の萬有を了得せられた時には、第二義的の境地であつたでせうか。それとも、第一義眞實境であつたのでせうか。」

「佛が若し、かく／＼の法を得たりとすれば、それは第二義世俗に随つて言ふ言葉である。この人がこの法を得たりとするは大なる迷執である。修行する道もなく、またその果報もないのが第一義である。一切の萬有は本來實在性がなく、皆平等無二である。」

「世尊よ、一切の萬有が本來あるべきものでないならば、平等無二と云ふことも亦有り得ないではありませんか。」

「一切の萬有は本來あることもなく、またないこともない。萬有には特平等相と名づくべき特性があるわけではない。平等を除いて更に個別なく、一切萬有の個別を離るゝのが即ち平等相である。この平等の境地は凡夫、または聖人の知

るべき境地ではない。」

「では、佛もまた知られないでせうか。佛もまた體顯せられないでせうか。」

「須菩提よ、佛もまた知ることが出來ず、佛もまた體顯せられない。なぜならば萬有の平等相と佛とは同一のものであるから。同一無二のものであるから、之を知り、之を體顯することもない。又佛法僧の三寶も一切の諸象と毫も異なることなく、萬有は皆平等一相である。佛はこの平等一相の眞理を諦觀して、不動不搖、不増不減で、而もよく一切の衆生を救濟する。」

第三 常 啼 品

- 一、聖者常啼の因縁
- 二、常啼の求道
- 三、帝釋天の試み
- 四、女人の歸依
- 五、衆香城に入る

第一、「須菩提よ、聖者が眞智道を求めるには、かの常啼聖者の如く修行せねば

ならない常啼聖者は今大雷音佛の淨土にあつて聖者道を修めてゐる。」

『世尊よ、常啼聖者は昔如何にして眞智を求められたでせうか。』

『常啼が昔眞智を求めた時には、身命を惜まず、名望利慾を求めず、ひたすらに眞實の法のみを求めた。かくすること時を經、ある日、彼は空中より彼を策勵する不可思議の聲をきいた。』汝善男子よ、是より東に行いて道を求めよ。行くこと遠くとも疲勞を念すること勿れ、睡眠を念すること勿れ、飲食を念すること勿れ晝夜を念すること勿れ、寒熱を念すること勿れ、内外を念すること勿れ、善男子よ、行く時に左右を見ること勿れ、汝行くときに心を破ること勿れ、物を破ること勿れ。なせならば物を破壊するはこれ佛道の礙またげなればなり。佛の道を行ふに礙またげあれば迷界に墮して生死を出づることなく、眞智を體得することを得ず。』と時に常啼はこの聲をきいて答へて云ふやう。

『私は當に教に隨つて修學するでありませう。私は一切の生きとし生けるもの

爲めに大光明となり、一切の佛の偉徳を集め、無上最勝の正覺を成就しませう。』

時にまた空中に聲あつて云ふやう。

『善い哉、善い哉、善男子よ、汝は空無相無作の眞理を歡んで、應に信心を起し、心に眞智を求め、自我の愛執を捨て、乃至一切の迷執を離るべし。當に悪人の集合を脱し、當に善師に親近し、供養すべし。善男子よ、汝が若し、かくの如く行はば、久しからずして眞智の教を聽かん。或は經典を手にし、或は聖者の説くところに隨はむ。汝は教をきいて心に佛の如き想をなせ。汝は恩を知つて眞智の偉徳を讃仰すべし。世俗の名利に惑され、俗事に親しむこと勿れ。但だ眞理のみを愛して、眞理をとく聖者の教に隨ふべし。常に穢れの心を生ずることなく、清淨の想を起して、自ら思念せよ。』われは未だ救濟力を得ず、佛は方便力によつて人類を救濟し、福德を得しめんが爲めに、もろくの苦惱をうけ、智慧に愛着

することなく、佛道をさゆることなく、悪心を生ずることなし。」と、何せならば、一切の萬象は個性の個性とするなく、個在の個在とするところなければなり。それ故に人類あることなく、自我あることなく、個人あることなく、一切の客観は幻の如く、夢の如く、影の如く、焰の如ければなり。善男子よ、汝は此の眞理實相を覺つて當に善師に隨ふべし。然らば、汝は當に眞智を成就することを得ん。汝は心に怨恨を起すことなく、只管に眞理を愛し、恭敬の心をもて佛陀に隨ふべし。」と。

時に常啼は空中の教に隨つてそれより東に行つた。東に行くこと暫くにして、忽ち心中に疑惑を生じて思ふやう。「私は何せ次の如きことを問はなかつたであらう。私は東に行つてそれより何處に去るべきであらうかと。又私は誰に従つて眞智をさくべきであらうかと。」

かく思ひ、かく心に憂愁を感じ、彼は聲をあげて啼哭いた。更に彼は思ふやう、

「予はかやうな疑惑の中に一日一夜を送り、乃至二三四五六七日七夜を過ぎて、しかも、なほ眞智の教をさくことがないならば、よし心身に疲勞なく饑渴寒熱を覺えぬとも、再び起つことが出来ぬであらう」と。

須菩提よ、此の求道士常啼の思ふところは誠に純眞であつた。彼は眞智の教をさくことの外に更に何物をも求めない。譬へば小兒が卒かに死するに、その母憂愁苦惱して啼哭し、更に他を思ひ念することがないやうに、彼は空中の聲に問はぬことを憂惱して、ひたすらに眞智の教を思ひ念じた。須菩提よ、かやうに憂惱して時を経るに、時に、空中に佛が現れて告げられるやう、

「善い哉、善い哉、善男子よ、過去の諸佛が聖者の道を修して、眞智を求めるときにも、亦今日汝が求めるやうに憂愁した。汝は勤めて精進し、眞理を愛してこれより東に行け。茲を去ること五百由旬ゆじゆんにして一城あり、名を衆香しゆかうと云ひ、七重の城廓よりなり、七寶をもて飾る。その城縦横十二由旬あり、國土豊樂安靜に

して人民極めて榮えあらゆる悦樂が満ちる。善男子よ、この衆香城に大高臺あり曇無竭尊者がその上にあつて、一日三回眞智の教を説く。爲めに城中の男女は聚集して大法座をなし、尊者を供養し、恭敬する。皆、眞智の教をきかんが爲めである。この説教の一座に列るものは眞智をきき、或はきいて體顯し、或は讀誦し、或は書寫し、或は正觀する。かくして、衆人は眞智の功德によつて、惡道に墮することなき、無上なる正覺を成就しやうとするのである、善男子よ、汝もまた曇無竭尊者の所に至つて眞智の教をきけ。曇無竭尊者は世々に汝の善師となるであらう。よく汝の爲めに正覺の要道を説き示すであらう。曇無竭尊者ももとは汝の如く眞智を求めた。汝は心に疑念を起すことなく、よく教に従つて東に行け。然らば汝は久しからずして眞智の教をきくであらう。」

時に求道士常啼は心に歡びを感じ、ひたすらにかくの如く思ひ念じた。「私は尊者曇無竭のところに至り、眞智の教をきき奉らう。私は眞智の教を聽いて、もろ

くの愛執を斷滅しやう」と。かくして、彼は佛道を修し精神を統一してもろもろの三昧に入ることを得た。

第二、この時十方世界の諸佛は常啼の三昧中に化現れて告げられるやう、「善い哉、善い哉、汝善男子よ、われらも曾つて聖者道を修行するとき、汝の如く眞智を求めて三昧の中に入つた。汝が今得るところの三昧も、亦、われらが曾つて得たところのものも同様である。われらは眞智を得、方便力を成就して不動轉の正覺を大成した。汝はよろしく佛法を尊重供養して、清淨の心を生ぜよ。善師に隨つて佛の如く學ぶべし。善師はよく汝を守護して正覺を得しめるであらう。」

時に彼は十方世界の諸佛に白されるやう、「何人をもて予の善師と仰ぎ、供養尊重し奉るべきでせうか」と。十方世界の諸佛は之に答へて申されるやう、「曇無竭尊者は即ち汝が師事すべき善師である。彼の尊者は汝をして無上なる正道を成就せしめるであらう。又彼の尊者は汝を愛護して、汝に眞智慧を教へるであらう。」

實に彼の尊者は汝の善師である。汝が曇無竭尊者を供養して、或は一年、或は二年、或は百年、或は千年に及び、又一切の珍寶樂具をもて供養し、三千大千世界のあらゆる寶物をもて供養し奉るとも、彼の尊者の恩に報いることは出来ない。」

この時求道士常啼は三昧より出で、四周を見るに十方世界の諸佛はその影を顯はさず、何物をも止めなかつた。茲に於て、常啼は心に思ひ念するやう、「彼の諸佛はいづこより來り、いづこへ還り去つたのであらうか。私が今諸佛を見奉らぬことは實に物悲しいことである。何故に、私は佛を離れるのであらうか。あゝ、誰かわが憂愁を斷滅するものがないであらうか？」と。彼は更に思ひ念するやう「曇無竭尊者は久しい昔より、常に眞智道を行つて、人類救濟の法を得、またもろくの教をよく記憶してゐられると云ふ。又彼の尊者は過去に於ける諸佛を供養し奉り、世々にわが善師となつて、私を教導し給ふと諸佛が仰せられた。それ故に私は彼の尊者に問ひ奉るであらう。諸佛は何處より來つて何處に行き給ひし

かと。」

かくして、常啼は曇無竭尊者を尊敬し奉り、心にかく思ひ念じた。「私は何物をもて尊者を供養すべきであらうか。私は今貧困なる爲めに華香瓔珞衣服、又は金銀眞珠瑠璃等をもて供養し奉ることは出来ない。私は今當に供養すべき何物の寶をも有たぬ。けれども、私は空手をもて尊者のもとに到ることは出来ない。若し空手をもて往けば喜悅の心を生せぬであらう。私は當にわが身を賣つて財を得、然る後に眞智道を得るために、法師曇無竭尊者に供養し奉るであらう。われらは世々の存在に於て身を喪ふことは實に無數である。或は死し、或は賣り、或は慾望の爲めに地獄に陥つて無量の苦惱をうけてゐた。それ故に今わが身を賣るとも毫も悔ゆることはない。まして眞理を求めのために我が身を賣ることはわれらの本望である。これより未だ曾つてなさぬ眞智道の爲めに、身を賣つてその説法師の前に供養し奉るであらう。」

この時、常啼は東方曇無竭に至る途次、とある大都城に到り、忽ち街頭に出で、大聲を發して云ふやう、「誰か人の肉を用ゐんとするものはありませんか。誰か人の肉を用ゐんとするものはありませんか。誰か人を買ふものはありませんか。」と。

時に悪魔は常啼の聲をきき、若し常啼が眞智を開顯して人類を救濟せば彼等悪魔の世界を減少するであらうことを憂へ、彼をしてさとりを成就せしめぬやうに、市人に説いて買ふことを拒ましめた。それ故に、常啼の身は終に賣れず、彼は憂愁啼哭して聲をあげて云つた。「私は如何なる大罪を得てゐるのであらうか。身を賣るとも遂に賣れない。けれども、私はどうしてもわが身を賣つて曇無竭尊者に供養し、眞智の教を聽き奉らう。」と。

第三、この時に、帝釋天たいてんは求道士常啼が果して眞實にわが身を捨つるや否やを試みやうと思つて、忽ちにして波羅門に身を變じ、常啼の處に至つて問うた。

「汝は何故に憂苦し、何故に涕泣し、何故に顔色憔悴してゐるのか。」

「波羅門よ、私は眞理を愛し、眞理を尊重してゐます。私は眞智慧の教をきく爲めに、わが身を賣つて曇無竭尊者に供養し奉らうと思ふのであります。然るにわが身は賣るとも遂ひに買ふものがありません。私は貧困の爲めに財寶なく彼の尊者に供養すべき何物もありません。わが身を賣つて財寶を得やうとするに、何人も買ふ人がありません。それ故に憂惱してゐるのであります。」

「お、愛すべき善人よ、予は今幸に神を祠る爲めにして人間の心臓、鮮血及び骨髓を得やうとしてゐる。そなたは今予の爲めに身を賣つてくれるであらうか。」時に、常啼は心中大いに歡喜して思ふやう、

「あゝ、私は今大利を博した。實に無上なる利益を得るであらう。今直ちにこの波羅門へわが身を賣るであらう。」と。彼の波羅門に告げて云ふやう、

「おんみの須る給ふところは今悉く分ち與へませう」

「では、そなたの價はいか程であらうか」

「おんみの思召に随ひませう」

かく云ひ終つて、常啼は右手に利刀を持つて、直に左の臂を刺して鮮血を執り、更に右の髀肉を割き切り、更に骨を破つて骨髓をえぐり出さうとした。

時に豪家の娘あり、遙かに樓上よりこの光景を眺め、心に思ふやう、「彼の人は何故にわが身を破り、自ら困苦を求めるのであらうか」と。彼女は速かに階上より下つて常啼の處に來り、問うて云ふやう

「おんみは如何なる理由^{ゆゑ}から、かやうなことをなされますか。自ら肉を截り、血を出し、骨髓をえぐり採るのはどう云ふ譯でせうか。」

「私はわが身をこの波羅門に賣つて、眞智の教をきく爲めに、曇無竭尊者に供養しやうと思ふのであります。」

「曇無竭尊者に供養すれば如何なる功德を得られるのでせうか。」

「善女人よ、かの尊者はよく眞智を學び、よく生きとし生けるものを救濟してゐます。そして、わが爲めに聖者のなすべき所、履むべき道を教へてくれます。私はその道を學んで正覺を成就し、正覺を成就するときに一切の生存の爲めに救ひ主となり金色の身、三十二相を得、大慈大悲大喜大捨及び佛の具有する一切の智徳を兼備し、無上なる眞理の寶を得て、一切の生存の爲めに分ち與へやうとするのであります。私はその大希願を成就する爲めに、わが身を賣り、わが肉を割き截り、甘じて憂惱困苦をうけるのであります。」

この時、かの豪家の娘は大いに感激し、心に驚き、全身に汗して常啼に云つた。「あゝ、おんみは實に實に得がたい求道者であります。おんみの説くところは誠に微妙であります。恐らく再び聞くことは出來ますまい。私は今おんみの用ゐ給ふ供養の財寶を分ち與へませう。私も金銀眞珠瑠璃玻瓈琥珀珊瑚等のもろくの珍寶及び華香瓔珞塗香衣服等の諸々のものを眞智及び曇無竭尊者に供養致しませ

う。おゝ、偉大なる求道者よ、おんみはおんみの身を苦しめることをお止めなさい。私はおんみと共に尊者のところに到つて、もろくの善根を積んで、微妙極妙の眞理を得ませう。」

この時に、波羅門に化現せる帝釋天は本身にかへり、常啼を讃仰して云ふやう、「善い哉、善い哉。汝の心は金剛の如く動搖することがない。もろくの過去の行者も、汝の如く修行して正覺を成就した。予は實には人の心臓も、鮮血も、骨髓も求めるのではない。但だ汝の心を試したのである。汝は今何を希願するか。予は汝の望みにまかせて分ち與へるであらう。」

「天神よ、さらば無上なる正覺をお與へ下さい。」

「無上なる正覺を與へることは自分のよくするところではない。予にはその力がない。それは佛陀の圈内に屬する。常啼よ。他に何物かを索めよ。予も亦汝に供養するであらう。」

「帝釋天よ、おんみが供養せられるならば、私の體をもとのやうに完全にして下さい。」

「よろしい。」

このときに、常啼の身體は忽ちにして平復、更に瘡斑をとめることがなつた。同時に帝釋天は忽然として相を穩してしまつた。

第四、時に、豪家の娘は常啼に告げて云つた。

「求道者よ、私の家にお出下さい。そして、おんみの要するものを私の父母にお索め下さい。何物でもおんみに與へるでありませう。私は速かに兩親のもとを辭して侍女と共に曇無竭尊者に供養致しませう。」

常啼は彼女の云ふ如く實行した。彼女は兩親に對し詳しく常啼及び曇無竭尊者のことを語り、只管に、自らもまた佛法を求め、さとりを成就せんが爲めに、曇無竭尊者の所に至らんことを請うた。時に、彼女の父母も大いに感激して云ふや

う、

「汝の讚仰するところは實に實に微妙の教である。もろくの佛の説き給ふ最第一の教である。一切の生存はその爲めに安樂を得るであらう。われらは汝の願を許すであらう。汝速かに行つて曇無竭尊者に親近し、よく供養をなし、大救濟心を起して怠墮すること勿れ」と。

第五、時に豪家の娘は七寶の車五百を飾り、侍女と共に乗り、更に一車には常啼を載せ、無数の珍寶を満載して、漸次東方に到り、衆香城に近付いた。遙かに衆香城を見るに七寶の莊嚴麗しく、七重の樓閣天に聳え、その他もろくの裝飾は實に眼をくります許りである。やがて、常啼及び豪家の娘等は城中に入り、遙かに曇無竭尊者を高座の上に眺めた。そこで、彼等は車より下つて歩行した。常啼は心中に喜びを感じることに、譬ふるに物なく、彼女及び五百の侍女と共に齋らすところの珍寶を供養し、一は眞智に、一は曇無竭尊者に捧げた。捧げ終つて、

彼は尊者を禮拜し、合掌して、詳しく茲に来る因縁を告げた。そして、更に云ふやう、

「尊者は先の佛を供養し奉つて、もろくの善根を植ゑ、久しく眞智道を修め方便力をもて自由を得られました。私はひたすらに尊者の教に随ひませう。尊者よ、私のためにお説き下さいませ。諸佛は何處より來り、何處に去るかを。そして、とこしへに佛を離れぬ方法をも。」(この章後品に續く)

第四 曇無竭品

一、曇無竭の説法

二、常啼の勇猛心

三、眞智の體顯

四、常啼本生の結論

第一、時に、尊者曇無竭は常啼に説き示された。

「常啼よ、佛は來ることもなく、また去ることもない。なせならば、萬象は本

來その實體なく、しかもその眞實相は不變のものであるから。そして、不變の眞如は即ち佛であるから。善男子よ、生ずることのないものは來することも、また去ることもない。然るに生ずることのないものは即ち佛である。又滅することのないものは來することも、去ることもない。然るに滅することのないものは即ち佛である。又第一義眞實境も、空も、無垢のものも、寂滅も、虚空性も、みな來ることも、去ることもない。然るに、第一義眞實境は即ち佛、空は即ち佛、乃至虚空性は即ち佛である。それ故に佛は來することも去ることもない。善男子よ、佛は一切の現象を離れて別存するものではない。佛の佛たる眞如と、一切の物の一切の物たる眞如とは毫も異るところはない。即ち一切平等で差別がない。一切の事象は常に一味平等であるから、無二無三である。これ畢竟、萬有は眞理空の中に落謝するからである。譬へば春の日中に、渴へたものが陽炎をみて水と思ひ、陽炎を追ふが如きものである。汝は、その水(陽炎)は何れの池、何れの山、何れの泉

より流れ來り、また何れの處に去ると思ふか。或は東海、西海、南海、北海の何れに入ると思ふか。」

「尊者よ、陽炎の中には水がありません。それ故に何れより來り、何れに去ると云ふこともありません。」

「善男子よ、けれども愚痴のものは熱渴に迫められ、陽炎を見て水なきに水の想をなす。これと同じく、若し、佛を見て何れより來り何れに去るかと問ふものも亦愚痴のものゝ妄見にすぎない。佛を見て肉身ありとし、色相を有すとすはみな世俗の謬見である。佛の眞實身は來ることなく、去ることなく、生ずるもことなく、滅することもない。譬へば魔術師が或は象、或は鳥、或は牛、或は羊、或は男、或は女等を化現するが如きものである。それらの化現のものは何處より來り、何處に去ると思ふか。」

「術者の行ふ幻事は眞實のものではありません。それ故に何處より來り、何處

に去ると云ふこともありません。」

「さやう、今佛の來り、佛の去るも、また同様である。夢中に諸種の物體を見るが如く、若し佛を見て肉身を見、色相を見るならば、それは差別の妄見である。尙凡夫愚者の範を脱してゐない。この人は屢々迷界をさすらひ、眞智を離れ、又佛の境界を脱する。善男子よ、佛は一切萬有が幻の如く、夢の如しと説かれる。若し、よく一切萬有を如實に知れば差別の妄見を起すことがない。一切萬有は悉く、生なく、滅なく、來なく、去なしと知る。若し、かやうに正しく知り得れば、この人は眞智道を修めて、正覺の境界に近づく。之を名づけて眞の佛弟子とする。」

このときに、天神帝釋天は天上の妙華を常啼に與へて申すやう、

「汝はこの華をもて大師曇無竭に供養しなさい。予は汝を守護するであらう。汝はこれより百千萬億の生存を救濟して無上なる正覺を成就せしめるであらう。」

かやうな善人は容易に見ることが出来ない。汝はまた一切の生存を愛して救濟を事とするが爲めに無量の苦をうけるであらう。」

茲に於て常啼は天神より妙華をうけ、忝しく大師曇無竭に捧げ奉つた。

「大師よ、私は今日より大師のもとに従つて、偏へに奉事し、偏へに供養し奉るであります。」

この時、かの豪家の娘及び五百の侍女も信心を起して常啼に語つた。

「私共も今日より大師に従つて、偏へに供養し奉りたいと思ひます。私どもは至誠の心をもて師の教に随ひませう。」

そこで、常啼は齋すところの五百寶車の寶及び豪家の娘並に五百の侍女を悉く供養し奉つた。時に、帝釋天は常啼の行爲を讃仰して云ふやう、

「善い哉、善い哉、汝は疾かにさとりを得るであらう。汝は必ず眞智の功徳を成就するであらう。過去の佛もまた汝の如く修行をなして、遂に正覺を得たので

ある。」

第二、時に大師曇無竭は常啼をして善根を具足せしめん爲めに、先づ彼の捧ぐる五百乗の寶物及び豪家の娘並に五百の侍女をうけ、受け終つて彼は更に常啼にかへし與へた。かくして、日没に至り、尊者は立つて宮中に入つた。時に常啼は尊者の留守中に身を正しくして坐臥せず、或は歩み、或は立つて尊者の說法を待つてゐた。尊者曇無竭は宮中に於て無量阿僧祇菩薩三昧に入り、それより七年の間一心に眞智道を修め、衆生救済を思念した。この七年の間常啼は倦まず、怠らず、或は立ち、或は歩み、此の二種の行儀をつくして、毫も坐臥し睡眠することなく、貪慾憤怒愚痴の心なく、心常に清淨を保つて尊者が三昧より出づるのを待つてゐた。かくして當に七歳を過ぎんとするとき、彼は心にかく思つた。「私は大師の爲めに說法の座を敷かう。尊者はその上に登つて說法せられるであらう。私はまた清淨潔齋にして種々の華をもてその一堂を飾らう。」と。そこで、豪家の娘

及び五百の侍女と共に七寶の牀を造り、五百の侍女が各々その上衣を脱いで牀の上に敷いた。かくして說法の座を造り、彼等は、更に一堂をして清涼淨潔ならしめ、地に水を灑ぐ爲めに更に水を求めた。然るに、この時忽ちにして惡魔あらはれ、彼等の善行を妨害する爲めに、一切の水をかくしてしまつた。そして惡魔は心に思ふやう、「常啼は水を求むるとも得ることが出来ぬ。正覺を求むるときに、若し一念でも惡心劣心を生ぜば、則ち智慧を得ることなく、善根を増すことなく、一切智を得ることが出来ない」と。

そこで、常啼はひたすらに水を求むるとも、遂に得ることが出来なかつた。彼は如何に奔走して水を求むるとも、遂に求め得ないこと知り、心中に堅く決心した。「今は致し方がない。われとわが身を割いて血を出し、その血をもて地に灑ぎ聖者をして塵垢にまみれしめぬであらう。われらは古へより生き更り、死に更り、身を喪うたことも屢々あつた。しかし、未だ眞理を求めのために身を喪うたこと

はない。今真理を求めるために身を喪ふことは實にわれらの本願である」と。
かく決心して、彼は遂に肉を刺して血を出し、血をもて地を清めた。之を見て豪
家の娘及び五百の侍女はその勇猛精進なるを讚歎し、悪魔はその勇壯に驚いて施
す術を失つた。時に、帝釋天は遙かに彼の行爲を見て讚仰するやう、「あゝ、未曾
有なる勇猛心よ、常啼及びもろくの女人はその心金剛の如く堅牢不拔である。
悪魔悪鬼と雖も遂に汝等の善根を破壊することは出来ない。汝等は身命を惜まず
深く淨心を保つて正覺を求め、一切の生存を救濟せんとしてゐる。あゝ、勇猛未
曾有なる求道者よ、真理を愛し、真理を重んずること實に最第一である。」と。か
く云ひ終つて、帝釋天は大聖曇無竭に供養せしめる爲めに、天の妙華をとり來つ
て、常啼に與へた。

第三、七歳を経て、曇無竭尊者は三昧より離れ、眞智を説く爲めに、無量の聽
衆に圍遶かこまれて、説法の座についた。常啼は尊者の座に來るを見て心中に大いに歡

喜踊躍し、天の妙華を供養し、恭しく禮拜合掌し、退いて一面に坐した。曇無竭
尊者は常啼の坐するのを見て告げられるやう、

「善男子よ、よくおきよ、今予は汝の爲めに眞智道を説き示すであらう。善男
子よ、一切の萬有は悉く一味に存在する。それ故に眞智道もまた一味である。又
一切萬有は悉く不動である。それ故に眞智道も亦不動である。又一切萬有は悉く
無生である。それ故に眞智道もまた無生である。かやうに、一切萬有が無邊無滅
なれば、眞智道もまた無邊無滅、須彌山が莊嚴なれば眞智道もまた莊嚴、虚空が
無分別なれば眞智道もまた無分別、眞理が不可得なれば眞智道もまた不可得、一
切の萬有がそのまゝ眞實なれば眞智道もまたそのまゝ眞實、一切の萬有が不可思
議なれば眞智道もまた不可思議である。これ、畢竟眞智はそのまゝ眞如實相であ
るから。そして眞如實相は一切の差別相そのままであるからである。」

時に、常啼は聖者の教をきいて、忽ちにして、三昧の境に入り、教の如く萬有

の一味を體驗し、乃至萬有の不可思議を味識した。

第四、以上の如く、世尊は詳しく常啼の過去世の因縁を説かれ、更に須菩提に告げて申されるやう、

『予は今三千大千世界の中に於て、もろくの比丘に圍遶せられ、衆人の爲めに眞智道をとく。そして、常啼がもろくの三昧の境に入つたやうに、予もまたもろくの佛も三昧を得て眞智を體顯し、大智慧道を説き示した。常啼は三昧を得てから眞智を體現して、もろくの眞佛と離れず、佛と共に生きて、一切の生きとし生けるものを悉く救濟して佛の國土に往生した。須菩提よ、この眞智を體得せるものは、一切の功徳を成就し、一切の妙智を得る。それ故に、六種の聖行を成就せんと希ひ、諸佛の智慧を味得せんと思ふものは先づ眞智道を學ばなければならぬ。眞實道は實に過去現在未來に於ける諸佛の母である。十方の諸佛は皆悉く尊重供養するところである。汝等よくこの教を記憶して忘れる事勿れ。』

第五 囑 累 品

一、本經の結論——阿難への付屬 二、會衆の歡喜

第一、時に佛陀釋尊は聖弟子阿難に告げられるやう、

『汝は如何に思ふか。佛は汝の大師であるか。又汝は佛の弟子であるか。』

『世尊よ、み佛は私の大師であります。私はみ佛の弟子であります。』

『さやう、予は即ち汝の大師である。汝は即ち予の弟子である。汝は汝の意志及び行爲に於て弟子のなすべきことをなし終つた。汝は意志行爲に於て予に供養し、供給して、予の意中の如く行つた。阿難よ、若し予のこの身が永く生存すれば汝の愛敬し、供養し、供給する心は常に清淨無垢をたもつ。けれども予が入滅の後に於ては、今汝が予に供養し、供給し、愛敬する一切の善行善心をもて眞智道に供養せよ。予は累ねて汝に言ふ。予が若し入滅の後に於ては、汝が今予に供養し、供給し、愛重する一切の善行善心をもて眞智道に供養せよ。予は堅く汝に』

付屬する。阿難よ、よく憶念して忘る勿れ。失ふ勿れ。教を傳へるに最後の人となることなく、よく後世に宣説せよ。「眞智道は某の時佛に聴き、某の時佛が宣説した」と。阿難よ、若し、現在の人並に後世の衆人が眞智の教を書き、又は受持し、又は憶念し、又は人の爲めに廣く説き、又は恭敬し、尊重し、讚歎し、又は華香寶衣燈燭等をもて供養するならば、この人は佛を見奉り、親しく佛より教を聞き、親しく佛に常侍するであらう。」

第二、釋尊は以上の如く、眞智を詳説し給うた。この深妙の教をきいて、彌勒等のもろくの聖者、須菩提、舍利弗、大目犍連、摩訶迦葉、富樓那、摩訶拘絺羅、阿難等の聖弟子並にもろくの會衆、及び一座に列する天神、鬼神等は皆大いに歡喜し、皆教の如く道を行うた。

現代
意譯 大品般若經 (終)

語彙索引

阿修羅 (Asura) 六道の一、略して修羅とも云ふ。佛教以前の印度教は、善神インドラに對する惡神としたが、佛教學は六道の衆生の一、即ち迷界の生存として論ぜられる。常に鬭争殺伐を事とする鬼神である。その身が遠く天神に及ばぬところより、天神を憎嫉して、絶えず天神の眷屬を滅滅しやうとする。鬭争殺伐を事とするを以て、後世には戰場を「修羅の巷」と稱し、勇將を「阿修羅王の如し」等と云ふに至つた。

阿難 (Ananda) 釋尊の叔父白飯王の子、提婆達多 (Devadatta) の弟。釋尊常侍の弟子、二十五年の間行住坐臥を共にす。記憶最も勝れ、遺教編纂の時、よく經を誦したと云はれる。

威儀戒 四威儀即ち行住坐臥の儀式作法等無數の戒を云ふ。別項戒參照。

一切智 序言「般若波羅蜜」の條下を見よ。

有爲法 有爲 (Samskṛta) とは「造られたるもの」「集められたるもの」の意味である。之に反して「造られざるもの」「集められざるもの」を無爲法と云ふ。有爲法と無爲法とで宇宙は成立してゐる。有爲法の中には物質と精神との全部が包含される。因縁 (別項參照) によつて生じたものである。之に反して無爲法とは因縁によつて生じたものでなく、因縁の力を離れて獨存してゐるもの。之に三無爲、九無爲、八無爲等の説がある。一例として三無爲を擧ぐれば、三無爲とは、擇滅、非擇滅、虚空の三である。擇滅無爲とは智慧の選擇力によつて得たる煩惱の滅、即ち涅槃を云ふ。智慧によつて眞理を觀察して、眞實の境に到れば、煩惱の生滅がない。即ちこの境地は因縁の和合によつて造られたものではない。非擇滅無爲とは智慧の選擇力によらずして得るもの、即ち生ずべき縁が缺けて生ぜぬもの、即ち因縁所生にあらぬものを云ふ。虚空無爲は虚空は一切の生滅なく、變化なく

一切種智 序言「般若波羅蜜」の條下を見よ。

一佛國より一佛國へ 多佛淨土の思想を宣説するを以て、佛國は無數にあり。勝れた聖者は神通を得て一佛國より一佛國へ到ると云ふ。しかし、それは表徴的に云はれた佛教の命題である。

因縁 (Hetupratyaya) 因とは結果を生ずべき直接の原因、縁とは結果を生ぜしむる間接の助縁を云ふ。因には六因、或は十因ありとし、縁には四縁ありとする。六因とな能作因、俱有因、同類因、相應因、遍行因、異熟因の六。四縁とは因縁、等無間縁、所縁々、増上縁の四を云ふ。本經には因縁、次第縁、縁々、増上縁の四とす。若し、因縁を因と縁との意味でなく、後の四縁の一とせば、因即縁の意味である。即ち萬有を生ずるに親しい原因をなすものを總稱して縁と云ふ。この場合は因と縁と異なることがない。

造くられず、たゞ礙りのないことを以てその本性とするから、これも亦因縁所生のものではない。かやうなものは無爲法と云ふ。

有漏法 (Samsarava) 漏とは煩惱を云ふ。煩惱を有するもの、即ち煩惱が中に於てよく増長し、よくその欲求を恣にし得るものを云ふ。即ち物心の諸象を云ふ。之に反して、無漏とは煩惱をして恣に増長せしめぬもの、即ち穢されぬものを云ふ。

有記法 無記に對す。一切の萬有をその性質より、善、惡、無記の三性に別つ。善性と惡性とは之を無記に對して有記とする。無記とは善不善にあらぬ性質を云ふ。

縁々 所縁々に等し。因縁の條下を見よ。

王舍城 (Rājagṛha) 釋尊當時マガダ國の首府で、現今のベンガル州パトナ市の南方ピハル地方で、ラジギル (Rajgir) と稱する地點である。その東方には釋尊の説法で有名なる耆闍崛

山(靈鷲山)があり、城外には竹林精舎があり、釋尊及びその弟子には極めて縁の深いところである。

力行

戒(Sila) 心身の悪を制して、善を行ひ佛道を成就せしめんとする制定。之には五戒、八戒、十戒、二百五十戒等種々の差別があるが、今本經六諭品に説くものみに註釋を加へる。名字戒とは名字によつて示すが如き、五戒、八戒、十戒、具足戒等を云ひ、修道人の差別によつて制定したる戒を云ふ。

自然戒とは自然に具足する戒、即ち性得の善を云ふ。律儀戒とは惡を止み、不善を制する比丘比丘尼の戒を云ふ。作戒とは作法によつて戒を得るもの、身口業の別戒。無作戒とは本來具ありし、作法を加へぬ戒を云ひ、威儀戒とは威儀三千八萬乃至無量の戒、非威儀とは威儀を用ゐぬ性得の戒を云ふ。これらの諸戒は唯戒を分ち

ながめたものである。

餓鬼(Deta) 六道の一、迷界の一存在。食を食るもの、陷る世界なりと云ふ。常に、饑餓に迫られる。

迦旃延(Katyayana) 釋尊十大弟子の一人本名をナラカと云ふ。哲學的頭腦を有せる思想家、論義第一と稱せられる。

觀照 般若波羅蜜即ち眞智の作用に名づけたもの、序言を見よ。

拘絺羅(Kausthila) 佛弟子、舍利弗の叔父である。

行 十二因縁の一、行とは善惡の本然のうごき、執意、意怒なり。

共法、不共法 共法とは衆生共受のもの、不共法とは如來特自の徳、譬へば十八不共法(別項參照)の如し。

五戒 五種の戒、即ち不殺生戒、不偷盜戒、

不邪淫戒、不妄語戒、不飲酒戒の五。

五根 信根、精進根、念根、定根、慧根の五を言ふ。信根とは佛の教、即ち四諦三寶(別項參照)等の道理を信すること。精進根とは教を信奉して身に修行努力すること。念根とは精進努力によつて心を教に隨はしめること。定根とは教を念することによつて、禪定を得、心を集中統一すること。慧根とは禪定を得ることによつて眞如實相を知ることと云ふ。

居士(Kulapati) 出家せず、俗家にあつて佛門に歸依せる男子を云ふ。後世は主として法名として用ゐられ、墓銘に刻されてゐる。

五力 信力、精進、念力、定力、慧力の五を云ふ。五根(別項參照)の作用について云つたもので五根と實質は同様のものである。

金色身 金色に赫灼として輝く如來の偉相に名づけたものである。

五分法身 佛及び聖者が具有する五種の徳、

戒身、定身、慧身、解脱身、解脱知見身の五、佛及び聖者は現身にあるとも煩惱を起し、煩惱に侵されることがなく、清淨の戒を持ち、禪定に入り、智慧を有し、解脱の徳を得、解脱によつて救済の大道を成就するもの、佛及び聖者の偉徳である。

解脱(Vimoksha) 迷界に繋るきづなを脱すること。即ち六道輪廻(別項參照)を断ち、つて自由なる悟を開くこと。三解脱入解脱等の説あり、三解脱とは心解脱、慧解脱、俱解脱を云ふ。心解脱とは心が貪愛を離れることを云ひ、慧解脱とは心が無明の闇迷を離れることを云ひ、俱解脱とは慧解脱によつて無明の闇迷を脱するけれども尙少分の無知を存して道を障げるを以てこの無知なる闇昧性を解脱することを云ふ。

結跏趺坐 座禪の場合に兩足踏を二膝の上にして坐することを云ふ。現今禪宗に於て、座禪の場合にこの威儀を用ゐる。

外道 (Tirihaka) 佛教徒が佛教以外の宗教及び、教徒を指して言つた言葉。後には邪教邪宗、邪道の意味に用ゐられた。

サ 行

作戒 戒を見よ。

三惡道 地獄、餓鬼、畜生の三道は苦惱多く惡處なるが故に三惡道と云ふ。

三界 欲界、色界、無色界の三、別項迷界を見よ。

三乘 (Triṇi yānāni) 佛の教を後世の佛教徒は大別して、一乗教、三乗教とすることがある。乗とは運載の義で「教へ」を意味する。三乗とは聲聞、緣覺、菩薩の三、聲聞とは佛の教なきいて覺る人、緣覺とは自ら佛の教の哲理を推窮して覺る人、この二種は共に自己の悟を究極の目的とし、自らの歡喜に満足するを以て小乗人とせられ、その教を小乗又は小乗教と稱せられ

る。その得るところの果報は廣く、深くない、然るに菩薩とは自利利他兼行の聖者で、大慈悲救濟を以て究竟目的とする。之を大乘人とせられ、その教を大乘又は大乘教と稱せられる。その果報は大にして佛となる。以上の三種を區別し、聲聞には聲聞の教を、緣覺には緣覺の教を菩薩には菩薩の教を説くものを三乗教と云ふ。即ち人によつて教を別々にし、善導救濟の爲めに佛の方便を用ゐて説いたものである。之に反して、一乗教とは、或は一佛乘と云ひ、或は如来乘とも云つて、佛陀自覺の究竟を説き示すもので、差別なく、一切皆平等にして救濟せられる高遠の教を云ふ。本經は一乗の精神を以て三乗差別の教を被するものである。

三十二天 四天王 別項參照のゝある四王天の上に當る初利天(とうりてん)に於ける三十三の神、即ち欲界天、須彌山上に棲んでゐる神、住善法堂天、住峯天、住山頂天、善見城天、鉢私地天、住俱吒天、雜殿天、住歡喜園天、光明

天、波利枳多樹園天、住險岸天、雜險岸天、摩尼藏天、施行地天、金殿天、鬘須臾天、住柔煙地天、雜莊嚴天、加意地天、微細行天、歡音喜樂天、威德輪天、同行天、閻浮婆羅天、連行天、預照天、智惠行天、樂分天、住輪天、威德顯天、威德焰輪天、影照天、清淨天の三十三神。

三千大千世界 全宇宙の總稱、欲界(日月、須彌山、四大洲、欲界天等)と色界の最下層とを合して一世界とし、この世界の千倍を一小千世界となし、一小千世界の千倍を一中千世界とし、一中千世界の千倍を大千世界と云ふ。大千世界には百億の日月、百億の須彌山、百億の四大洲等あり、この小千世界、中千世界、大千世界を合して三千大千世界と云ふ。

三寶 (Triṇi ratnāni) 佛教の總括、佛寶、法寶、僧寶の三、佛寶とは佛陀を云ひ、法寶とは佛陀の教を云ひ、僧寶とは佛陀の教を信奉する僧侶を云ふ。古來この三寶を通俗的に若しく

は哲學的に種々の區別をなして論ぜられた。

三分清淨 身によつてなされる行爲、口によつて言はれる言葉、意によつて思はれる一切の念慮の三が共に穢れなく、惡なく、淨潔なるを云ふ。

三昧 (Samādhi) 本經に百八種の三昧を説く。三昧とは禪定に同じく、心を集中統一して眞理を觀察することを云ふ。

十善 十善戒、十善道とも云ふ。惡行を止めて十種の善を修めるもの、不殺生、不偷盜、不邪嫉、不妄語、不綺語、不惡口、不兩舌、不貪欲、不瞋恚、不邪見の十。

十二部經 原始的佛教經典の總括。本經序品七十二、七十三頁を見よ。

十二處 六根六境を云ふ。六根とは六種の感覺知覺を了受するもの、即ち眼、耳、鼻、舌、身、意の六根である。眼根とは色を感じる神經即ち視神經の如きもの、耳根とは音を感じる聽神經

の如きもの、鼻根とは嗅神經の如く、舌根とは味神經の如く、身根とは觸覺末梢神經の如く、意根とは精神中樞の如きものである。現代の生理學の神經腦中樞と全然同一ではない。次に六境は以上の六種の感覺知覺の對象となる外界を云ふ。眼根の對象たる色境、乃至聲、香、味、觸、法の六境を云ふ。この六根六境を合して十二處と云ふ。この十二處の外に、認識の主體たる六種の意即ち眼識、耳識、鼻識、舌識、身識、意識の六識を加へて十八界と云ふ。

十八界 十二處を見よ。

十八不共法

佛陀の徳は人類の徳と異り、佛陀特別の偉徳がある。その偉徳を十八に分ち述べたもの。一に佛の身に過失あることなく、二に佛の口に過失あることなく、三に心に過失あることなく、四に異想なく、五に不定の心なく、六に不知己捨の心なく、七に欲滅することなく、八に精進滅することなく、九に念滅する

ことなく、十に慧滅することなく、十一に解脱滅することなく、十二に解脱知見滅することなく、十三に一切の行爲は智慧に隨つて行ひ、十四に一切の言語も智慧に隨つて行ひ、十五に一切の心作用も智慧に隨ひ、十六にその智慧は一切の過去を知り、十七にその智慧は一切の未來を知り、十八にその智慧は一切の現在の事象を知る。

十力(Daśa balāni) 佛が衆生救済に必要な

なる十種の徳力、本經四攝品を見よ。

識 十二因縁の一としては母胎に托する最初の心識なりと云ふ。

色界(Rūpadhātu) 三界の一、迷界を見よ

四正勤(Catvāri pradhāni) 又四正斷とも云ふ。惡を制して善を増長する四種の修行法

規、即ち(一)未だなざる不善をば勉めて起さざらんと制御し、(二)既になしたる不善をば勉めて之を斷滅せしめんと精進策勵する。(三)未

だなざる善をば、勉めてなさんと努力熱中し(四)既になしたる善をば勉めて永遠に止めんと精進すること云ふ。

四諦(Catvāri satyāni)

佛道成就に資す

る四種の道理、苦諦、集諦、滅諦、道諦を云ふ。諦とは明かなる道理、即ち真相を云ふ。(一)苦諦とは現實世界の真相、即ち人生及び世界は悉く苦惱であると觀するもの。(二)集諦とは、現實世界の苦惱が真相なれば、その苦惱のよつて來る原因は何ぞやと云ふに、それは人間に渴愛がある爲めである。この根本的な意慾によつて苦の果報をまねくのである。かやうに、苦惱の原因の真相を集諦と云ふ。(三)滅諦とは苦惱の原因を知つて、その原因を滅し盡した状態を云ふ。即ち涅槃の境地で、人生の苦惱を離れる。

(四)道諦とは苦惱の原因を滅し盡くすには如何なる方法をとるべきであるかについて、その道理を示したるもの、即ち八正道、四念處、四正勤(別項参照)等の修行方法である。

次第緣(Daṃmanantara-pratyaya) 一體に等無間緣と云ひ、四縁の一である。

七空 序言「空の思想」を見よ。

七覺分(Sapta bodhy-angāni) 七菩提分とも云ふ。念、擇法、精進、喜、除息、定、捨の七を云ふ。正覺を得るための修行項目である。

實相 眞如の別名、但し本經にあつては、現象即實在の思想を宣説するものであるから、實相は靜止的の眞理を指すのではない。如實の世界、如々に活動しつゝある世界の眞相を云ふもので、これは直觀によつて感知される絶對の境地即ち空である。それ故に、實相とは又無相とも云ひ、一相とも呼ばれる。

十方 東方南方、西方北方及び四維上下を十方と云ふ。十方の世界と云へば一切の世界を意味する。

出世間法 世間法の條下を見よ。

自相空 序言空の條下を見よ。

四禪 色界の四種禪と云ふ。

自然戒 作法威儀を用ゐるに自然に得る戒、別項戒を見よ。

種善根 善根功徳を植ゑること。即ち佛道修行をすること。

四天王 天(Deva)とは天上に棲む神及び天上界を云ふ。六道(別項参照)の一、即ち迷界に生存する衆生の一種である。これに諸種の別あり今四天王とは天界の最も下層四王天に棲んでゐる四神で、その壽命は五百歳である。但し、四天王の一日一夜の時間を人間に比すれば、恰度人生五十年に當ると言ふ。四天王とは東方にゐるものを持國天と言ひ、南方を増長天、西方を廣目天、北方を多聞天と言ふ。佛教の守護神として崇拜される。

舍利弗(Sariputra) 釋尊十大弟子の一人。智慧第一の稱あり。マカダ國ナランダ村に生れ

釋尊成道の後第三年目に其の教に歸依した。舍利弗の本名は優波底沙(Uparisya)と言ふ、その母を舍利と言ふ處より、舍利子又は舍利弗と呼ばれた。「集異門足論」二十卷、「阿毘曇論」三十卷は舍利弗の作又はその弟子の集録によるものなりと言ふ。

沙門(Sramana) 宗教の修行者、釋尊當時は佛教以外の修行者に用ゐたが、後には佛教の修行者を言ふやうになつた。

四無礙智 義無礙智、法無礙智、辭無礙智、樂說無礙智の四、本經四攝品を見よ。

四無量心(Catvāry apramāṇa-cittāni) 慈心、悲心、喜心、捨心の四を言ふ。

四無色定 純粹觀念界に於ける四種の定を言ふ。即ち無色界の定である。

衆生(Sattva) 生きものを言ふ。地獄、餓鬼、畜生、人、天、阿修羅の六道の生物の總稱するもの、迷界流轉の生存である。但し、時に

は人間のみを指して衆生と云ひ、又人生の意味に用ゐられてゐるものもある。

須菩提(Subhūti) 釋尊十大弟子の一人、般若の空を知ること第一と稱せられる。本經の中心人物、舍衛城の長者鳩留(ケル)の子である。

小乘(Hinayāna) 大乘に對する語、乘とは運載、運乘の義、即ち乗せ運ぶこと、佛が教によつて衆生を悟界に乗せ運ぶことを言ふ。今小乗とは大乘と稱する教徒が、相手をけなして言つた言葉である。大乘の教が自利利他の完成を目的とするに對して、小乗の教は自己の證を目的として人類救済の大願を懷くことがない。本經中に小乗を誹難するのは主として有部の思想を否定するものである。後世、小乗教とは(一)經典に於ては四阿含經を指し、(二)學派に於ては印度に於ける小乘二十部、及び支那に於ける俱舍宗、毘曇宗を指し、(三)小乗の教徒としては聲聞、緣覺を指してゐる。聲聞と緣覺とは共

にわが身の修道、わが證の歡びに満足して、利他、大慈悲の思想を缺く、個人本位の佛教徒である。

所緣々(Arahāna-pratyaya) 四緣の一、因緣參照。

四念處(Catvāri smṛtyupathāni)

心を一點に注集して眞理を觀察する四種の方法四種とは肉身を心の集中とするものと、感受を心の集中とするものと、心を集中とするものと、外界の諸象を集中とするものとである。

(一)肉身を觀察するものは之を身觀又は内身體身觀となし、森中靜處にあつて結伽跏趺坐し、一々の呼吸を制し、心を靜めて、身體の不淨なることを觀じ、更に肉身の死して屍となるべきを觀じ、更に皮肉腐亂して終に塵垢となつて何をも止めざることを觀する。かやうに觀察して、肉身の常住にあらぬこと、及び肉身の慾を起すべからぬことを觀察するのである。(二)感受を

觀察するものは外身循身觀となし、苦樂等の感情は畢竟肉身によつて生ずるものなりと觀察して、そのよるべからぬこと、及び情的一切の慾望を斬滅する。(三)心を觀察するものは、一心に智慧觀をなし、貪非貪、瞋不瞋、痴非痴等の心作用を一々觀察し、精神的慾望を斷滅するものを言ふ。(四)外界諸象を觀察するものはよく一切萬有の實在すべからぬことを觀じて、一々の生滅變化の相狀、及び一々の特質等を明かにして、煩惱を排除して、さとり道の道に進まんとするものである。以上の四種は精神を統一して身心内外の一切を觀察して、眞理の洞觀に努め更に眞理の體得に進むべきものである。

自用 自ら用ふべきもの、即ち彼此自他の差別をなして、これは自ら用ふべきものとし、是は彼用ふべしとするもの。

修治 善を修し、身を治めること。

神通(Abhijira) 行者が修行を積むに隨つ

て超自然力を得る。この超自然力を神通と呼びそのあらはれを奇蹟と稱する。神通に六種あり天眼、天耳、他心、宿命、神足、漏盡を言ふ。天眼とは遠近大小一切の音を聞く力、他心とは他人の心に思ふ一切のことを知る力、宿命とは過去の一切を知る力、神足とは上下遠近自在に歩み得る力、漏盡とは一切の煩惱を斷滅せしめる力である。

世間法 世間法とは佛教以外の一切の修道、行爲教法等を指す。之に反して佛教に説く一切の修道、行爲、教法等は之を出世間法と言ふ。

精進(Virya) 六波羅蜜の一、佛道を修めるに勇猛精進して、努力策勵すること。序言波羅蜜の條下參照。

禪定(Dhyana) 精神を平靜に、統一して眞理を觀察すること。三昧と同じ。

善法 法(Dharma) とは一切の事象を

指して言ふ。この一切の事象、一切の行爲を二大別して善法不善法といふ。善法とは佛教のまことに順應するすべての行爲、すべての物、すべての心作用を總稱する。之に反して、不善法とは正覺に反くすべての行爲、すべての物、すべての心作用を總稱する。

増上縁(Adhipati-pratyaya) 四縁の増上即縁の意、因縁參照。

タ行

帝釋天(Sakrādeva) 釋提桓因(Brahade-vendra) 橋尸迦(Kausika)と稱せられ、印度教に於ては因陀羅(Indra)と稱せられ、吠陀諸神中の王、空中を支配する神として永く崇拜せられた。佛教に於ては佛教の守護神とせられ、釋尊の成道を助けた神であるといふ。本經に於ける重要な聽者、天王品以下に出づる。佛教より見れば、帝釋天も尙迷界の一衆生なれば、

佛弟子須菩提等について空の意義をきかしたものである。

大乘(Mahayana) 小乘(別項參照)に對す一切衆生の救済を目的として、成佛の本懐をとげんとする教、佛滅後七八世紀頃より隆盛を極めたもの、本經の如きは大乘勃興の初期に成立したものであるから、特に小乗教及び小乗教徒を誹難してある。經典としては「華嚴」、「法華」等諸經を代表とし、それらを信奉する宗旨を大乘宗と云ふ。日本、支那の佛教は殆んど大乘に屬す。

胎生 四生の一、胎生のものを受ふ。四生とは、濕生、卵生、胎生、化生の四、一切の生物の生産を四種に分類したものである。畜生、人間の如きは胎生である。

大慈悲 一切の生存を救済して佛果(さとり)を成就せしめやうとする佛の愛、佛の慈悲ない

ふ。

大迦葉(Mahākāśyapa) 釋尊十大弟子の一人。本名をピッパラーヤナ(Pipparayana)といひ、迦葉姓中の大首なれば大迦葉といふ。初め四吠陀等の一切の哲學を學び、聰明且つ巨萬の富を藏し、多くの眷屬を有してゐたが、釋尊の教化に感じて、巨萬の富をすて、一の乞食となり、戒律を嚴守し、名望一世に高く、頭陀第一と稱せられる。釋尊の滅後第一結集の時には上座となつて、遺法を繼めた。

大智度論(Mahā prajñā pāramitā 'sā-
ūtra) 「大般若經」の註釋書、龍樹(別項参照)の作、略して、智度論又は大論又は釋論といふ。弘始四年夏より同七年十二月迄を費して、有名なる譯經家、羅汁の譯出せるもの全部で百卷よりなる。現今縮冊藏經中の往一より往五に至る五卷に載録されてゐる。

大聖者(Mahāsattva) 摩訶薩の譯、大士、

大人、大有情の意味、聖者の更に上首、長上となるべき人である。

中道 眞實の眞如は靜止的なものではなく、活動變化そのものに存在するとして、迷界を破壊することなくして眞理あり、迷ひも、悟もあることなく、現象即實在にして毫もゆるぎ變ぜざるものか中道實相とする。後世には天台宗、三論宗等に詳述されてゐるが本經に於ては「空」を意味する。序言空の條下を參照せよ。

地獄(Naraka) 迷界の一部、六道の一、地下にあり。この世界に轉生するものはあらゆる苦痛をうける。天上の光明世界に對して地下の暗黒世界である。肉體的慾望を恣にするもの、落ち行く世界、これに八熱地獄、八寒地獄あり別項八大地獄參照。

地水火風空識 萬有の元素を六種に見たもの、之を六大(Satmanubhūta)といひ、或は四大或は五大等にする説もある。地水火風空の五

は物質元素、識は精神元素である。この四大乃至六大の説は印度思想に於て殆んど共通のものとして論ぜられた。

轉輪聖王(Cakravartikarāja) 四天下を統治する大王なりといふ。略して、轉輪王、又は輪王といふ。

天龍 龍の一、よく佛の教をきいて道を得るといふ。八部衆の一。

十 行

如幻三昧 魔師が幻を化現して、世界に遍滿せしめるやうに、聖者が三昧の中に入つてよく一切の世界に化現して衆生を救濟するもの。

忍辱 序言波羅蜜の條下を見よ。

涅槃(Nirvāna) 寂滅、は滅度等と譯す。一切の苦痛を脱して自由安穩の生命を開顯する正覺の境をいふ。之に有餘依涅槃、無餘依涅槃等の別あり。意譯楞伽經索引參照。

ハ 行

白骨觀 精神を統一して眞理を觀察するもの、一、即ち人身を觀察して生老を経て死となり、死して後肉腐亂し、終に白骨となることを念じ、人身の無常にしてよるべからぬことを洞察するもの、この觀法は極めて幼稚なものとせられる。

八大地獄 地獄に八種の別あり。等活、黑繩、衆合、叫喚、大叫喚、焦熱、大焦熱、無間の八を八熱地獄といふ。又八寒地獄あり、頸部陀、尼刺部陀、頰嘶吒、囉々婆、虎々婆、嘔鉢羅、鉢特摩、摩訶鉢特摩の八種とす。普通八熱地獄を八大地獄と稱する。「正法念處經」「俱舍論」「瑜伽論」等參照。

八聖道(Arya-aṣṭāṅgika-mārga) 解脱を得る修道生活の要項を八種に分けたもの、正見、正志、正語、正業、正命、正精進、正思惟、正念の八。

波羅門(Brahman) 波羅門教を奉ずる教

徒即ち僧侶をいふ。波羅門教とは「四吠陀」を信奉する印度宗教の總稱である。印度に於ては古より社會に四種の階級を立て、一に波羅門、二に刹帝利、三に吠舍、四に首陀羅とし、波羅門族を最も高貴尊嚴なる種姓としたのである。

非威儀戒 威儀即ち儀式作法を用ゐて戒をうけず、又は行住坐臥に威儀を用ゐずして得ずる戒。

不善法 別項善法を見よ。

不淨觀 心を静めて眞理を觀察するもの、一即ち人身を觀察して、人身の清淨ならぬことを洞察する。即ち九穴よりは常に不淨を出し、死しては肉腐敗し、漿血を出し、惡蟲を生ぜしめて、一として清淨なるなきを觀察して、人身の無常にしてよるべからぬことを知るものである。不共法 共法(別項)及び十八不共法(別項)を見よ。

富樓那(Purna) 釋尊十大弟子の一人、辯論第一の稱あり。滿願子と呼ばれ、又その母を彌多羅尼(Mitranī)といふより、彌多羅尼子ともいはれる。

菩提樹 釋尊が正覺を成就するとき一樹の下に坐して眞理を觀察し、遂に忽然として大悟した。爾來その樹を菩提樹といふ。菩提とは正覺を意味する。

煩惱(Klesa) 迷ひの心作用をいふ。その最も根本なるものを貪、瞋、痴の三種とする。即ち迷妄の心の根源はわれらが愚痴蒙昧なる爲めで、隨つて欲すべからざるものを貪り、怒るべからざるものを怒るからである。この三種を三毒と稱してゐる。六煩惱、十煩惱等種々の説あり。

マ 行

摩訶迦葉 大迦葉を見よ。

迷界 三界の總稱。三界とは欲界、色界、無色界の三、われらの屬する世界をいふ。欲界は地獄、餓鬼、畜生、及び人間の棲む謂はゞ地球(但しこの世界は平面なりとす)をいひ、色界とはこの地の上であり、無色界とはその上に無限に擴つてゐるのである。これは印度從來の世界觀についていつたもので、佛教はこれと輪廻論、自我論と聯結して、巧みに眞理をといてゐる。意譯楞伽經索引參照。

名字戒 別項戒を見よ。

無爲法 造られ、又は聚められぬもの、隨つて生滅變化なきもの、因縁生に非るものである。別項有爲法を見よ。

無記法 有記法を見よ。

無色界(Arūpadhātu) 三界の一、迷界を見よ。

無作 有無に執着することなく、又後の爲めに造ることなき絶對の心境をいふ。空、無相、

無作を以て三昧と稱し、又三解脱門とも稱せられる。

無作戒 作すなくして本來性得の戒を云ふ。別項戒參照。

無生法忍 不生不滅なる眞理を無生法といひ、その理を體得して動かぬものを無生法忍といふ。

無生智 不生不滅な眞如を知る智慧。

無諍三昧 三昧の一、精神を統一して、是は眞理、彼は非眞理なり等と分別する迷妄を離れ、一切の論議論争を離れた禪定を云ふ。

無所受三昧 眞如實相を觀察して、眞理は無相なるが故に受なく、所受なきを直觀するもの。

無明(Avidyā) 煩惱の根本、愚痴闇迷にして明智に反するもの。

無漏法 有漏法を見よ。

目連(Maudgalyāyana) 目犍連又は大目

健連と稱せられ、釋尊十大弟子の一人、神通第一と稱せられる。本名は拘律陀(Koṭṭha)といひマカケ國の波羅門に生れ、舍利弗と共に佛に歸依した。その著を稱するものに「法蘊足論」十二卷あり。

ヤ行

夜叉(Yakṣa) 苦活と譯す。鬼神の一。

欲界(Kāmadhātu) 三界の一、迷界を見よ。

ラ行

龍樹(Nāgārjuna) 佛の滅後八百年頃に南天竺に生れ、大乘を宣揚した名徳。大乘教の大成者といはれ、各宗の祖師と仰がれる大學者である。初め波羅門教を學び、中頃佛敎に歸依して小乘を學び、後に大乘の深奥を窮めて、大いに歡喜し、外道を破し、小乘を退けて、偏へに大乘敎の宣揚に努めた。その著に「大智度論」百卷、「中觀論」四卷、「十二門論」一卷、「十住毘婆

沙論」十四卷、讚法界頌、十八空論等二十一部百六十四卷あり。その思想は大乘思想を統一し、現象即實在の思想を宣べるもので、「般若哲學」を窮明して、一種の批判哲學を構成したものである。佛敎思想史上に於て、釋迦滅後印度に於ける最も重大なる一區劃を形成するものである。

靈鷲山(Gṛdhrakūṭa) 耆闍崛山、ギジャクツセン)の意譯、釋尊五十年の説法は多く此地に行はれたと稱せられる。マカケ國王舎城の東に當る小高い岳である。

律儀戒 別項戒を見よ。

六道輪廻 六道とは地獄、餓鬼、畜生、阿修羅、人、天の六生存をいふ。この六種の生存を生き變り死に變りして轉々として廻るものを輪廻といふ。この六種の生存はともに迷界困苦の存在である。この輪廻の必然を脱して、自由な世界に入るものを解脱といひ、正覺といひ、涅槃といひ、成佛といふ。

大正十一年三月廿八日印刷
大正十一年三月三十日發行

【非賣品】

譯著者

三井晶史

發行者

立川雷平

印刷者

大杉直次郎

東京市麴町區山元町一ノ三

東京市麴町區飯田町一ノ六

發行所

佛教經典叢書刊行會

東京市麴町區山元町一ノ三(新光社内)

電話九段二六二六・振替東京四五四九八

504
22



終